第 32 回　猪名川自然環境委員会　議事要旨

１．日　時　　令和 5 年 1 月 27 日（金）14:00～16:00

２．場　所　　国土交通省 近畿地方整備局　大手前合同庁舎　5 階災害対策関連室 2

３．出席者　　委員：川﨑委員（WEB）、竹門委員、田中委員、服部委員、松井委員（WEB）、
村上委員、森下委員（委員長）
猪名川河川事務所：佐渡事務所長、星原副所長
山口総括保全対策官、酒井建設専門官、中山保全対策官
（工務課）　山崎工務課長、土山専門官
（園田出張所）鈴木所長
庶務：いであ株式会社　　兵藤、佐中、高地、養田、野元、渡辺

４．議　事　(1) 工事箇所の環境面からの評価
(2) 猪名川自然再生事業等のフォローアップ
(3) 「令和 5 年度底生動物調査」における河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）

５．結　果

(1) 工事箇所の環境面からの評価

（植生に関する環境配慮）

- 河道掘削工事におけるヨシ保全（猪名川 2.2k～2.6k）及び伐木・伐採（除根あり）におけるゴキヅル保全（藻川 1.0k～4.4k）について、現地を見て指導・助言をしており、工事の実施の際にも対応していただきたい。

（汽水域の干潟・浅場環境の保全・創出）

- 猪名川の汽水域において、今後のどのような環境を創出したらよいのかという問題設定ができており、事業に反映していけるとよい。
- 河道掘削による将来の環境変化を踏まえて適地を選定し、実際に対策を講じることが重要である。また、対策の実施後には、順応的管理として手直しをしていくことが重要である。
- 汽水域の環境をよくしていくことは重要であり、ヒメヌマエビが確認されたらすばらしい。汽水域の生物として、特に底生動物や稚魚・仔魚に着目してみていくとよい。
- 現況の干潟に生息する生物の実態把握を行い、指標種を明確にしておく必要がある。

(2) 猪名川自然再生事業等のフォローアップ

（河原・水陸移行帯の再生のフォローアップ）

- 河原・水陸移行帯の再生は、河原・水陸移行帯ができたということだけでもよかったと考えている。カワラサイコ等の河原固有の植物は、再生事業を実施しても戻ってこなかったが、上流域や支流を含めて絶滅しているため、戻りようがない状況にある。
- 河原・水陸移行帯の再生は、比高の適切な維持管理に加えて、土砂が動くことにより自然裸地が

維持されるという両面から評価する必要がある。評価においては、土砂の動態を促進するような対策が必要であることを記載していただきたい。

- 猪名川大橋地区で実施したオギの移植については、非常にうまくいっており、全く問題ない。

（縦断連続性の回復（魚道）のフォローアップ）

- 調査結果のとりまとめにあたっては、在来種と外来種の種数を分けて示していただきたい。在来種がどのように変化し、外来種がどれだけ増加したのかが分かるようにする必要がある。
- アユは高木井堰までは遡上しているが、潜在的な生息域は直轄管理区間よりもはるかに上流にある。ウキゴリは直轄管理区間を生息域と考えてよい。評価にあたっては、遡上に対する移動障害だけではなく、遡上した先に棲み場所があるのかを合わせて評価する必要がある。
- フォローアップにおいては、どことどのように繋がっていたらその河川が生き返るのかということを考えていくことが重要であり、モニタリングとは異なっている。河川を生かすためにした方がよいことを把握するためにも、上流の情報も把握しておく必要がある。
- モニタリング調査では、生物を相手にしているため完全に一緒にすることはできないが、どの業者が調査を実施しても、比較できるような調査方法に近づけていただきたい。
- 個体数と種数の関係で何を目指すのか目標値を考えていく必要がある。今後、もう少しデータを積み重ねて魚道整備の基本的な方向性を決めていくことが重要である。

（一時的水域の機能）

- 生物にとって重要な箇所として、下流に広がる氾濫原の一時的水域（ワンド・たまり）があり、ミナミメダカやタナゴ類が生息できる環境である。指標種としてイシガイ科二枚貝が重要であり、今後も調査を続けていただきたい。

(3) 「令和５年度底生動物調査」における河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）

（補足地区①の箇所の変更）

- 汽水域～淡水域の範囲が変化するため、猪名川の補足地区①は、下流端は 1.0k、上流端は 3.8k まで入れた方がよいのではないか。調査の方法・頻度・回数・箇所などはできる範囲で実施することになるが、調査範囲としてカバーできている方がよいのではないか。
- 汽水域～淡水域に生息する底生動物について、ヌマエビ類を着目する種に加えていただきたい。
- 考察・評価においては、横断測量や航空写真撮影を実施した際に、これらの物理環境に関する情報を、調査結果と合わせて記録しておくことが重要である。

（魚類調査）

- 調査時期の文章で「盛夏になると、水温が高温になり魚類の活性が低下するため、注意が必要である。」との記載があるが、感潮域から河川域で調査を行う上ではあまり生じないのではないか。決定的なことを記載しない方がよく、留意が必要である。

（陸上昆虫等調査）

- 令和４年度の河道掘削箇所付近でヒメボタルが多数確認されており重要であるため、令和６年度河川水辺の国勢調査において陸上昆虫等調査を行う際に留意が必要である。

以上